北東北の経塚 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八重樫, 忠郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000208

北東北の経塚１

八重樫　忠　郎

はじめに

東北地方の中世陶器を集成した東北の中世陶器展が、東北歴史資料館で開催されたのは、1983年のことであった（東北歴史資料館1983）。展示を主導した藤沼邦彦さんは、「平泉周辺の様相が判ってくれば、経塚数は増えていき、東北地方に全国の３分の１以上の数の経塚が存在するというような状況になるかもしれない」というようなことを言っていた。

この話を聞いて、畿内や九州で発生した経塚が、東北地方にそんなにあるのだろうかという疑問と、事実ならそれはすごいことだとの感慨が生まれている。しかし後に岩手県立博物館が行った岩手の経塚展では、経塚と考えられる遺跡が格段に増えていた（岩手県立博物館2000）。

2004年のことであるが、岩手県北上市の上須々孫館経塚の調査に立ち会う機会を得た（北上市教育委員会2006）。調査指導には、経塚研究の第一人者である村木二郎さんが来ており、経塚に関する概説と現在の研究の到達点というご講演も行っていただいている。その内容には、感心するところが多かったが、陶磁器壺単体埋納が多く、経筒が発見されることが稀な北東北の経塚に関して、経塚ではないのではないかという疑念を持っていることが、言葉の端々からうかがえた。

ご存じのとおり北東北には、終末期のものを除いてごく少数の地域にしか古墳文化は及んでいないことから、塚状の遺構は中世墳墓や経塚と考えられているが、塚墓自体も非常に少ない。この状況からそれらは、経塚である可能性が高いと考えている。にもかかわらず経塚ではないのではないかとの考えが生まれる背景には、現在の経塚研究が内包する大きな問題点が係わっている。

本稿においては、その問題点を明らかにし、北東北から今までとは異なる角度からの新たな経塚研究を提示することを目的とする。経塚研究が、新しい段階に進むならば、経塚は概ね全国に分布することから、分布傾向が何によって起こった事象なのか、経塚そのものが持つ意味の変化、などについて論じることができるようになる可能性がある。そしてそれらは、文化がどのようにして伝播していったのかをもいずれ明らかにするだろう。

１．経塚研究の現在

経塚は、江戸時代にまでさかのぼる盗掘や、不時の発見によって認識されたものが多く、発掘調査によって確認された例は少ない。そのために出土状況が分かるものはわずかであり、現地の遺構については全壊している場合さえもある。このような状況から経塚研究は、必然的に出土遺物の研究にならざるを得なかったと、極論するならばいうことができるであろう。

文献史学と考古学の経塚研究に関する論考は、枚挙に暇がない。たしかに経塚遺文の研究は、願主や施主、勧進僧などの存在やそれぞれの関係を明らかにしてきたし、その地方を治める武士たちとの関わりも想像できるまでになった（関1985）。また銅製経筒の研究は、その制作技法からある程度の流通エリアを有する複数の鋳物師集団が存在したことを突き止めている（村木2004）。この研究によって、ごく少数しか出土していない北東北の経筒に関しても、どこのグループの鋳物師が係わっていたのかが分かるようになってきた。素晴らしい成果といえ

る。

しかしながら、記録だけは残っていても出土遺物が失われ、さらに出土遺跡も完全に破壊されたもの、出土遺跡が不明なもの、火葬墓との判別が難しいもの、出土遺物は不明だが盗掘された塚状の遺跡などもあり、追跡調査を行うことができないものも多い。これらが障害となり、経塚集成は行われたことはなく、全国に何基の経塚が存在したのかさえ、未だに不明確な状況にある。

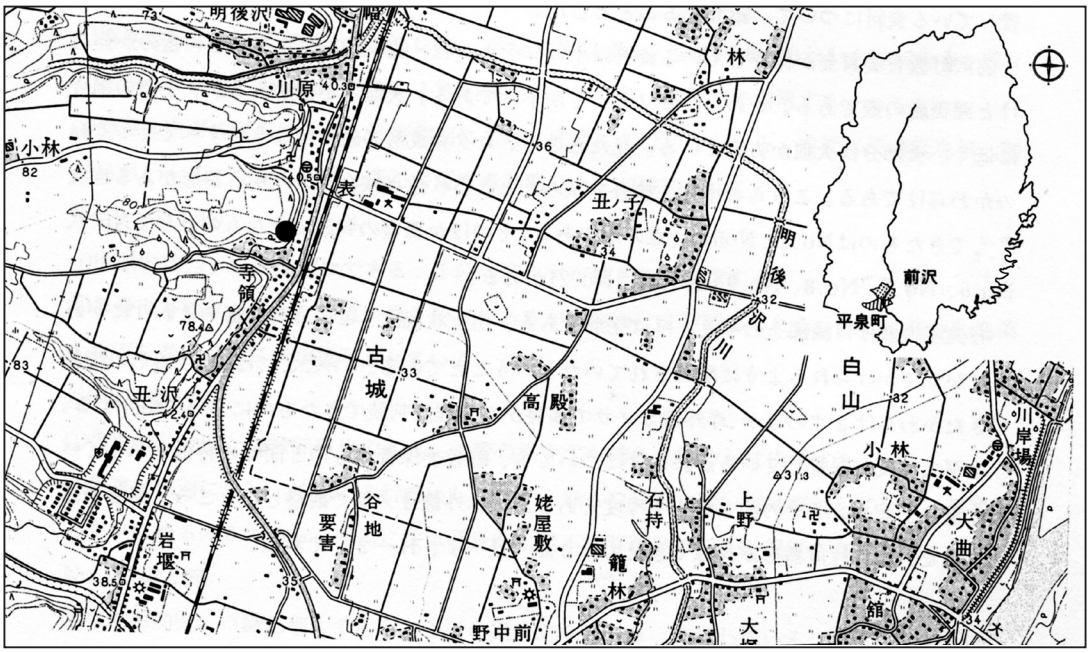
また紀年銘や願文などが残っていないものは、当然ながら『経塚遺文』に掲載されるはずもない。『経塚遺文』を見れば一目瞭然だが、掲載されている12世紀から13世紀の銘文は、そのほとんどが畿内以西のものである。すなわちこの結果から読み取れることは、東北地方には経塚の数そのものが少ないか、一定数の経塚は存在するものの銘文のあるものが少ないか、どちらかということであるが、この問題についても明確にされていない。

２．経塚研究の問題点

繰り返すが、出土状況が判然としないことが多い経塚遺物という性格上、資料としての限界性があることはいうまでもない。しかしながら現在の研究状況が、経塚研究のすべてかというと、そうとは思わない。少なくとも考古学から経塚にアプローチをする場合、塚そのものの研究と出土状況すなわち埋納方法については、できうる限りにおいて確認や検討を行うべきである。

そしてそれらを明らかにできるならば、塚の大きさと形状と埋納遺物にある一定の法則を見出すことができるかもしれないし、地域によって塚の大きさや埋納方法が異なる可能性もある。すなわち経塚研究が抱える大きな問題点は、出土遺物研究という枠をあまり越えられていないということにある。

たしかに遺物が出土した経塚が、半壊または全壊しているため、調査は不可能だという声もあろう。そのとおりで、失われた経塚も多いに違いない。とはいえ、遺存している経塚も少なからず存在している。それらの調査を行うこと



第１図　寺ノ上経塚位置図

によって、今まで解明できなかった多くのことが判明する可能性がある。

遺物研究から遺構研究へという流れは、考古学の足跡ともいえるものであろう。経塚研究をその段階に押し上げたいと考えている。以降に何例かの調査事例を挙げたい。

３．発掘調査を行った経塚

岩手県奥州市前沢寺ノ上経塚（平泉関連遺跡発掘調査団2017）からは、完形に接合された渥美壷が１点出土している。この状況では経塚かどうかは分からないわけであるが、幸いにも法華経が墨書されたかわらけが共伴していることから、経塚であることには異論は出ないものと考え、調査を行った。

青森県平内町白狐塚遺跡（平泉関連遺跡発掘調査団2018）は、高さが２ｍにも及ぶ大型の塚であり、頂部には盗掘坑がある。この規模の塚は、平泉町内の中尊寺や毛越寺境内には何基か存在しており、経塚と考えている。この遺跡は、塚の頂部付近から陶器破片が多数表採できることが地元住民の間で知られていたことから、さらに経塚である可能性が高まったため、調査を行っている。

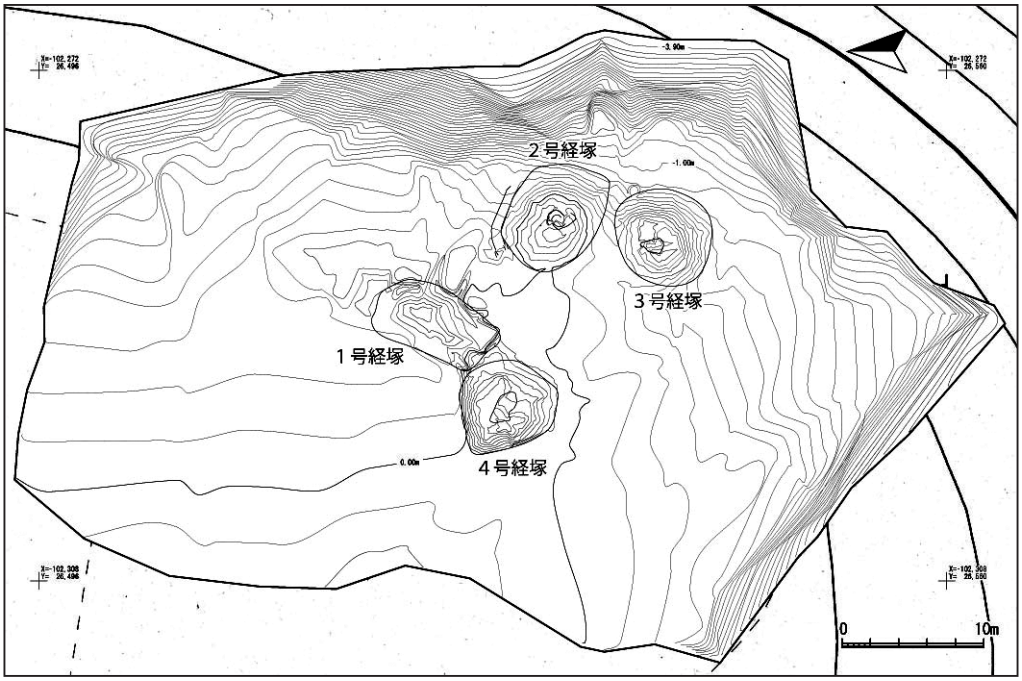
（１）寺ノ上経塚

４基の経塚は、見晴らしの良い胆沢段丘の東端部に位置し、東には北上川に開析された低位段丘が広がる。４基の塚は、２基ずつ南北に並んでおり、高さ１ｍ前後、径は５～８ｍほどで、いずれも頂部に盗掘痕が認められる。

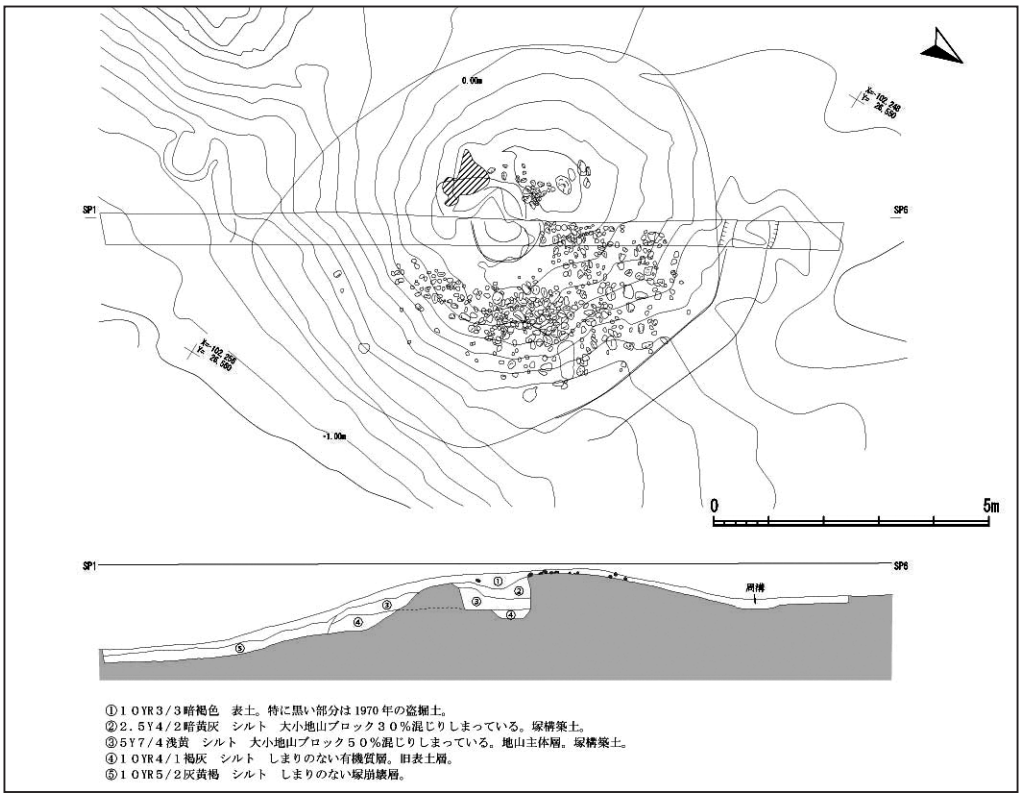
１号経塚と４号経塚、２号経塚と３号経塚が、それぞれ近接し、規模も類似することから、何らかの関係があったものと考えられる。１号経塚と４号経塚は、ともに畑に浸食され、原型を残していない。対して２号経塚と３号経塚は、概ね当時のままと推定される。

３号経塚全体の精査を行ったが、遺物は確認できなかった。さらに盗掘痕跡を断割ってみたところ、覆土は比較的古い様相を呈していたことから、盗掘を受けたのは近代以前と感じられ

第２図　寺ノ上経塚調査区

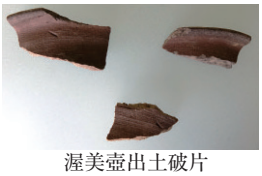


平面図

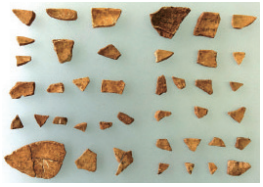


2号経塚

第３図　平面図・断面図



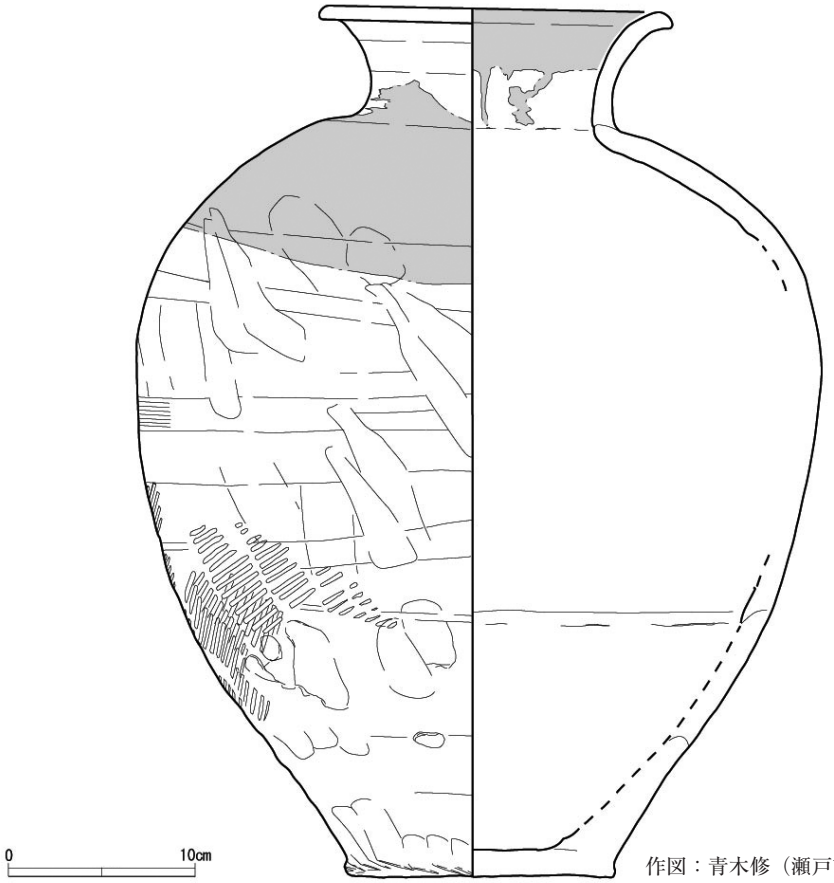
渥美壺出土破片



出土かわらけ破片

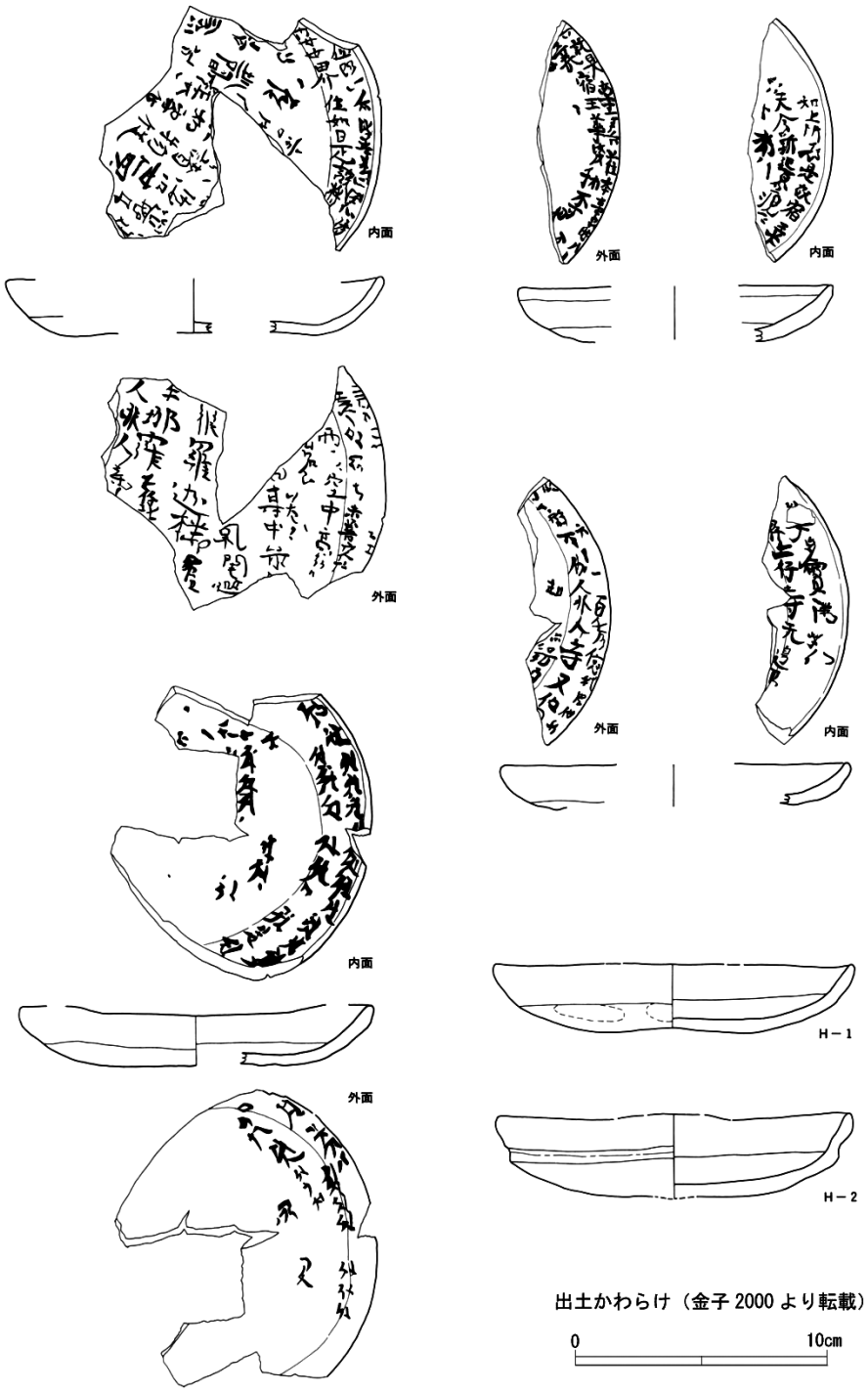
須恵器土師器

渥美壺



作図：青木修（瀬戸市埋蔵文化財センター）

第４図　渥美壷と出土遺物



第５図　かわらけ

た。

これらの中、２号経塚は、昭和45（1970）年、地元住民によって掘られたもので、出土したかわらけと渥美壷が、現在は奥州市教育委員会によって保管されている。また、掘った地元住民から、「渥美壷は正立しており、口の周辺にかわらけが立てかけられるように置かれていた」との証言を聞き取っている。そのため、「掘り始めた真っ先に粉々になった」という。

かわらけは、すべてが手づくねかわらけで、大小があるが、大型には墨書が認められるものが多い。墨書は、梵字のみのものもあるが、判読可能なものは、法華経の第７巻のみが記されている。大型かわらけは、渥美壷には入らないことから、やはり壷外に置かれていたとしか考えられない。

渥美壷は、大型の広口壷であり、口径18.0㎝、底径13.6㎝、器高46.3㎝を計る。肩部に灰釉が施されているが、低温焼成のため発色は悪い。12世紀中葉のものである。

東北地方で発見される経塚の大半が、単基であるのに対し、寺ノ上経塚は、複数基の経塚が営まれていることから、霊場的な場であったと考えられ、字名のとおり近隣に寺院などがあった可能性が高い。また、４基のうち最も大きい２号経塚が、昭和45年まで盗掘されなかったことも疑問である。何らかのタブーが存在したのかもしれない。

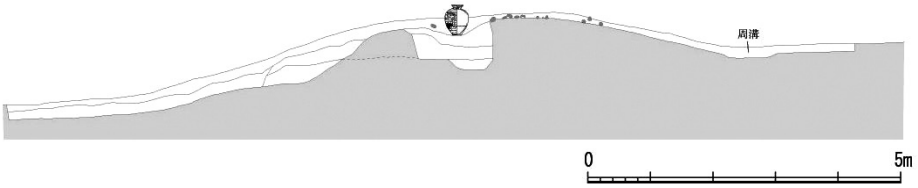
経塚には、紙本経以外に礫石経や瓦経なども埋められることから、かわらけに墨書することもそれほど不思議ではない。しかしながら渥美壷の周りにかわらけがあったとするならば、渥美壷の中には何が入っていたのであろうか。第７以外の法華経７軸が入っていたとも考えられるが、いずれにしても特殊な埋納といえる。

２号経塚は、現在確認できる規模で、径８ｍほど高さは１ｍ程度を計る。旧表土を取り除かずに、その上に地山起源の土を２回にわたって積み上げ、葺石を施して形成している。北西側では周溝が確認されたが、反対側からは発見されなかったのは、塚の崩壊層が流れ出て、流出してしまったものと考えられる。

基本的には全面に石が施されていたようである。一部に多数重なっているところが認められるのは、盗掘の時に上位から外されたものなのであろう。清掃時にかわらけ細片が数点、主体部周辺の表土層から多数のかわらけ細片と渥美壷破片３点が出土しているが、塚構築土からは遺物は皆無である。かわらけには墨書が認められるものが数点あったが、過去の発掘されたものには接合されなかった。対して渥美壷破片は、すべて接合されたことから、1970年に地域住民によって掘られた経塚は、間違いなく２号経塚であることが裏付けられている。

このたび口縁部破片が、風倒木の根から出土したことから、盗掘前から渥美壷は、木の根によって欠損していたようである。また渥美壷は、塚が現在の高さだとすると、20センチ程度外に出ていたことになる。そこにかわらけを立て掛け、さらに石で覆っていたとしか考えられないし埋納形態といえる。

特徴としては、塚は大きいが造成は緻密とはいえない。石室は設けず、刀子などの利器もない。地下に埋めるのではなく、人為的な塚の頂部に壷を埋める方法や地上に壷の一部が出る埋め方、法華経墨書かわらけが伴うなどの様相



第６図　寺ノ上経塚の埋納方法

は、西日本では例のないものではないだろうか。

（２）白狐塚遺跡

白狐塚遺跡は、直径13mほどの不整円形を呈し高さは２ｍの規模を有する巨大な塚である。基部からは不可能だが、頂部に上るならば北に陸奥湾が見えることから、高い塚にされた理由はここにあると考えている。

塚構築土は、南側に低い地形がみられることから、この付近から土採りを行って地山を突き固めたものと考えている。表面には川原石が葺かれていたようであるが、現位置を保っているものは少ない。頂部には三角点が設けられているが、その脇には盗掘坑がみられた。

昭和段階より中世陶器破片を表採できることが知られており、本州最北端の経塚の可能性が高いということで発掘調査を行った。調査の結果、盗掘は２度にわたって行われたことが判明したが、川原石による葺石があること、陶器破片が散乱していること、火葬骨がないこと、そしてこれほどの規模の塚を造る理由は、経塚以外には考えられないという結論に至っている。また経塚に埋納されていた壷については、特定はできなかったが、可能性があるとすれば51か160であろう。

調査によって167点に及ぶ中世陶器が出土した。これらは、主に盗掘坑から出土したものだが、表土や現位置を保っている葺石中からも発見されている。出土陶器の大半は、３㎝四方未満の小片であるが、接合されるものも多く、壷は口縁部でみると４個体以上、底部で３個体以上、鉢は２個体あり、最大では９個体以上、最小でも６個体以上あることになる。明確な甕の破片は出土していないが、個体数が多すぎることから、一般的な経塚出土遺物ではないことは明白である。

生産地別では、確実に渥美窯製品と判断できるものは、115などの３点の同一個体と考えられる片口鉢破片しかない。

平泉から出土する陶器破片を見ていると、一部に亀裂が入っていても製品として堂々と流通していたことが判る例がある。しかしながらこの出土遺物の中には、割れ口の３方に自然釉がかかっている破片が、38など数点含まれていた。3方が割れていたとなれば、さすがに器形を維持することはできない。

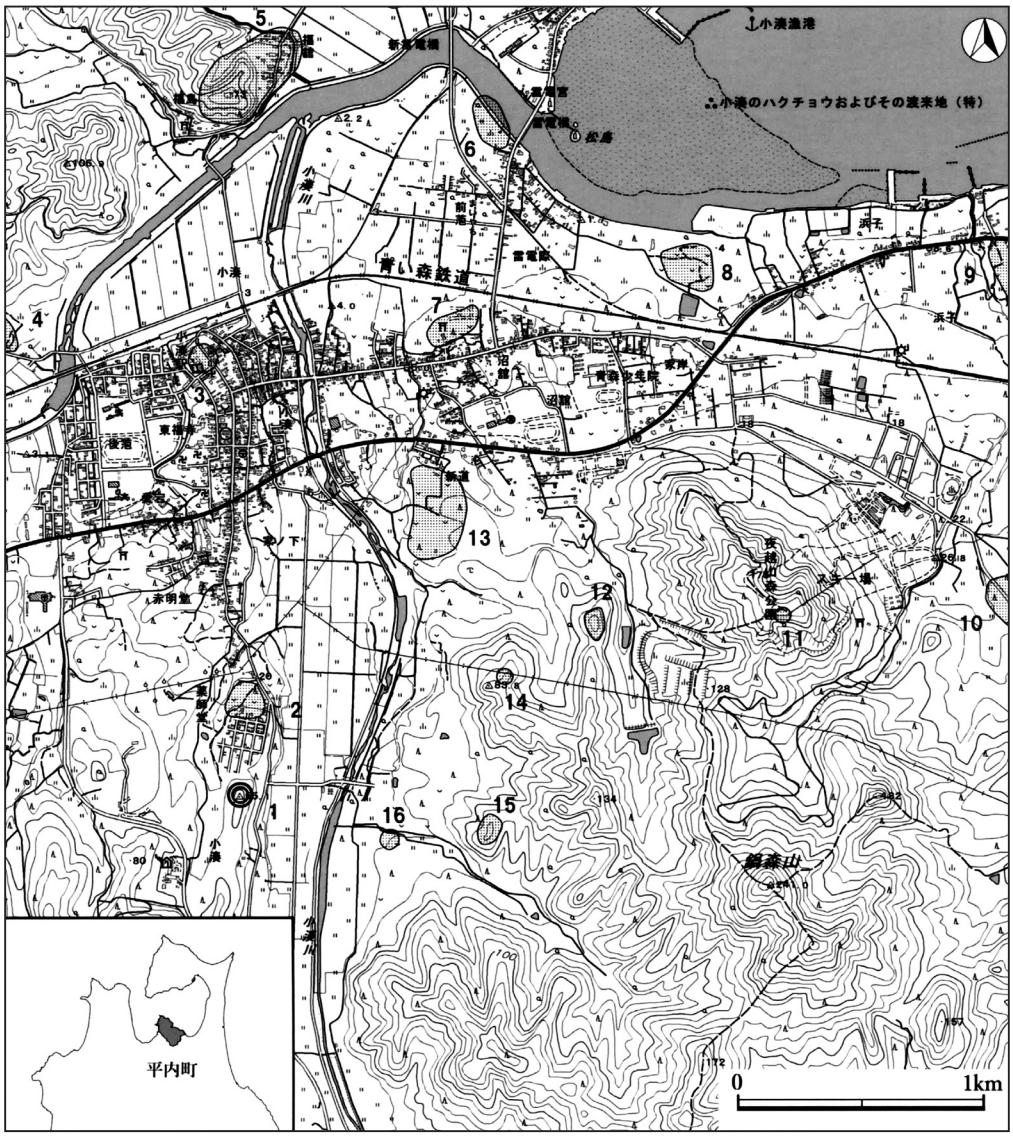
また、確実に同一個体であり、本来は接合されるべき破片なのだが、上を接合すれば下がくっ付かず、下を合わせれば上がずれるというものが、131と173、25と86と２組あった。これらは紛れもなく焼成途中で破裂したものである。

以上により出土陶器の大半は、陶器窯の灰原資料としか考えられない。131は内外面ともに黒っぽく、胎土は、砂粒が多く黒みを帯び、一見すると渥美窯と判別がつかない。接合はされなかったが、同一個体の下胴部の破片163があり、その部分には縦長格子紋押印が施されている。内面の調整は、横ナデが明瞭であり、外面は横ヘラナデが行われている。

25は外面に黄色の釉がかかり、内面は褐灰色を呈し鉄分が噴き出ていた。胎土は瀬戸窯に近い砂粒の多い黄橙色をしている。内面の調整は明瞭な横ナデであり、131と同様に渥美窯の整形技術を有している。両者ともに渥美窯製品とも言えなくはないが、やはり違和感はある。

これら２点が窯資料であることから、形態からは51と160は渥美窯製品と判断されるものなのであるが、前者は25と後者は131と胎土が類似することから、軽々に判断ができなくなっている。118は水沼窯に近い赤褐色の胎土で、肩部に突帯が付く破片である。76は渥美窯とは異なる胎土であるが、表面に布の痕跡と並行沈線による文様らしきものが描かれている。39と154は同一個体の可能性もあるが、胎土は水沼窯に酷似するきめの細かい赤褐色を呈し、内面は横ナデ、外面には格子状の押印があり、硬質に焼き上がっていることから、水沼窯製品と判別はできない。

33も渥美窯の技術で作られた壷底部だが、胎土は渥美窯のものとは異なる。８は底部であることから生焼けで、やはり渥美窯の技術で作られた壷のものであるが、胎土は水沼窯に似ている。73は甕の可能性がある底部付近の破片であるが、水沼窯に類似した胎土を有し、非常に焼

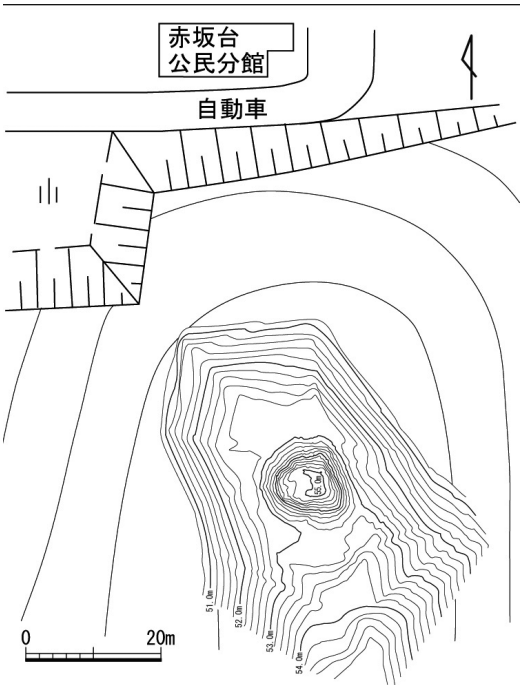


遺跡分布図

番号	遺跡名	時代
1	白狐塚遺跡(経塚)	中世
2	薬師堂遺跡	縄文
3	小湊館跡	中世
4	盛田遺跡	平安
5	福館遺跡	中世
6	雷電際窯跡	平安
7	沼館遺跡	中世
8	家の下遺跡	縄文(晩)

番号	遺跡名	時代
9	掘替(1)遺跡	縄文(後)
10	掘替(2)遺跡	縄文
11	夜越山塚(経塚ヵ)	−
12	内鍋森館跡	中世
13	槻の木遺跡	縄文(晩)・平安
14	錦木塚(経塚ヵ)	−
15	小沢館跡	中世
16	小沢遺跡	縄文(後・晩)

第７図　白狐塚遺跡位置図



第８図　白狐塚遺跡地形図

け歪んでいる。102は片口鉢の破片であるが、水沼窯の独特の片口鉢の口縁部に酷似している。

・経塚埋納遺物について

渥美窯の片口鉢破片が１個体分存在するので、渥美窯の壷破片が含まれている可能性はある。渥美窯の壷として考えることができるのは、前述のとおり51と160しかない。片口鉢を蓋としてどちらかの壷が経塚に埋納されていたのかもしれない。

次には、水沼窯製品が埋納されていたかについて考えてみる。水沼窯製品である可能性が高いものは、８、39、73、102、118、154であり、最大で６個体、最小でも３個体はあったことになる。経塚に埋納していたにしては数が多いし、しかも底部や胴部の破片が多いことから、この部位が欠損した場合、製品としては成り立ちがたい。つまり盗掘により全体的に割れてしまったとなれば、他の部位の破片も遺棄されるであろう。しかし個体数が多い割には破片が少なすぎるので、やはり水沼窯の製品は、この経塚には埋納されていなかったと考えるべきである。

・陶器破片の意味

陶器破片が、経塚埋納遺物が割れたものではないとすれば、これらはなぜここから出土したのであろうか。概要の中でも触れたが、昭和の頃から地元の方々の間でも、白狐塚遺跡から陶器破片が拾えることは知られていた。おそらくは、本来は大量の破片があったものと推測される。同じところを２回掘り返した盗掘坑であったが、近現代のものと考えられる新しい方の盗掘坑には、多数の礫と陶器破片が投げ込まれていた。盗掘した当時には、周辺に陶器破片が多数あった証左であろう。初めて白狐塚遺跡を訪れた際にも、数点の破片を表採している。

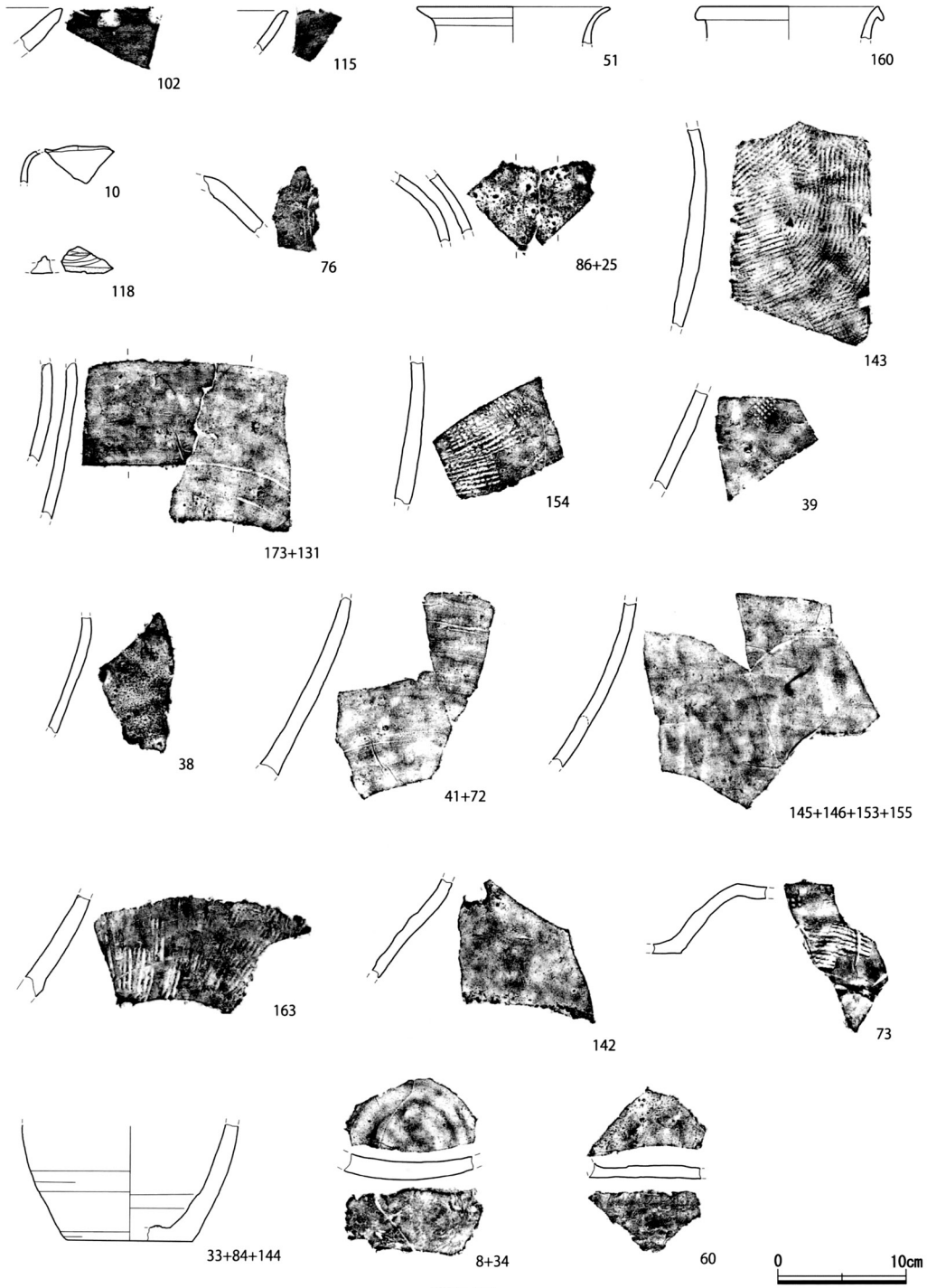
しかしながら発掘調査に際して、周辺もくまなく踏査したが、塚以外の部分からは、陶器破片を表採することはできなかった。つまり陶器破片は、塚にまかれていたものなのである。では何のためにまかれていたのか。

トレンチのセクションポイントの付近には、葺石が現位置を保っている箇所が認められた。その葺石を観察していると、石の間に陶器破片ががっちりと食い込んでいた。この状況から陶器破片は、経塚の葺石の役割を担って塚を覆っていたことが判る。全国的に見ても陶器破片を葺石代わりに使っている経塚は管見にふれず、非常に特異な例と考えている。

灰原資料が流通することは考えにくいことから、近隣に中世陶器窯が存在したとしか考えられない。この窯については、別項に記しているし論点がずれるので多くは述べないが、最北端の中世陶器窯である可能性が高い（八重樫2020）。

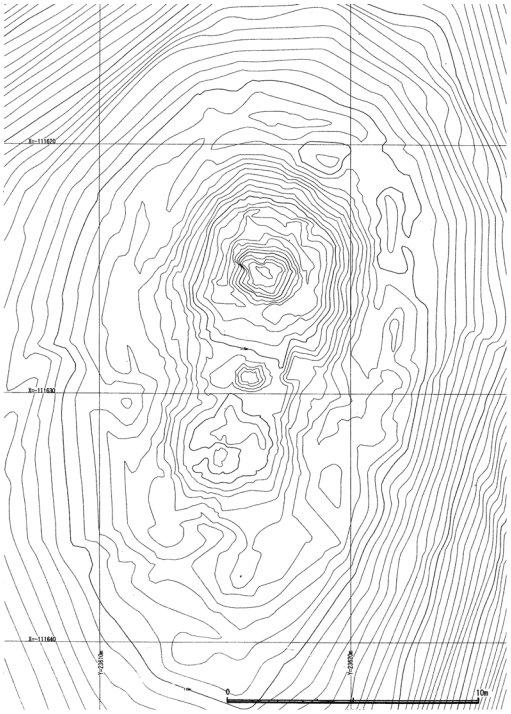
（３）発掘調査から判明したこと

両経塚に共通していることは、地面に掘り込んで経典を埋納するのではなく、塚を構築後に塚頂部に経典を埋めていることである。そのため経典は、地下ではなく中空にあるような格好になり、宝塔の塔身に納置された状況に似る。また両者ともに塚が大きいことから、視覚に訴

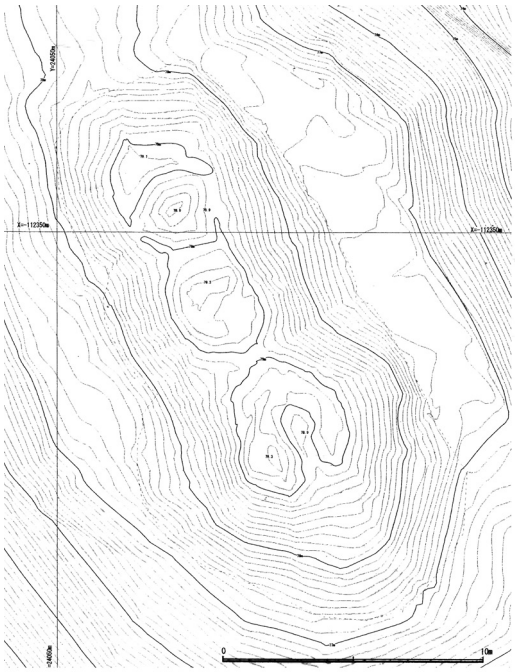


遺物図

第９図　白狐塚遺跡出土遺物



第10図　中尊寺峯の薬師経塚



第11図　毛越寺経塚

えることを意識していたことは明らかといわざるを得ない。京都周辺の経塚を何回か見学したが、塚は気をつけて見なければ、見過ごすようなものばかりであった。規模に関しては、明らかに北東北の経塚が大きいといえる。しかし、陶磁器単体埋納が多く、刀子や和鏡などが伴う例は、ほとんどないのも事実である。

４．測量調査を行った経塚

平泉とその周辺の経塚に関しては、多数の測量調査を行っているが、本稿では中尊寺峯の薬師経塚と毛越寺経塚、宮城県栗原市の熊口五輪沢経塚の測量図を掲載したい。

中尊寺峯の薬師経塚は、中尊寺の南側に位置する山頂に直線的に連続して３基設けられている。すべてに盗掘坑が認められる。中尊寺に近い北側のものが最も大きく、直径８ｍ程、高さが1.5ｍ程度ある。人頭大の川原石が、盗掘坑内に多数入っているし、葺き石も比較的大きいものが多い。

毛越寺経塚は、毛越寺の金堂円隆寺背後の北側尾根に、はやり直線的に連続して３基設けられており、すべてが盗掘されている。南側のものが大きく、直径10ｍ程度、高さは２ｍを越す、平泉最大の経塚である。

熊口五輪沢経塚は、４基あり、そのうち２基には12世紀後半の平泉型宝塔が伴っている（狭川2018）。最大のものは10ｍ四方程の方形の積石塚であり、高さは１ｍ程度、積石の中には多数の文字が記された礫石経が含まれている。地主さんが清掃しているため、非常に良好な状態で維持されており、さらに何度か僧侶をお願いして供養も行っているという、現代に息づく経塚である。

５．判明したこと

掲載した５カ所の塚のうち、法華経墨書かわらけが伴う寺ノ上経塚、多字一石経が積石に含まれる熊口五輪沢経塚は、お経を埋めた塚であることから、経塚である。この２カ所の経塚か

ら、遺跡としての経塚の定義について考えてみたい。

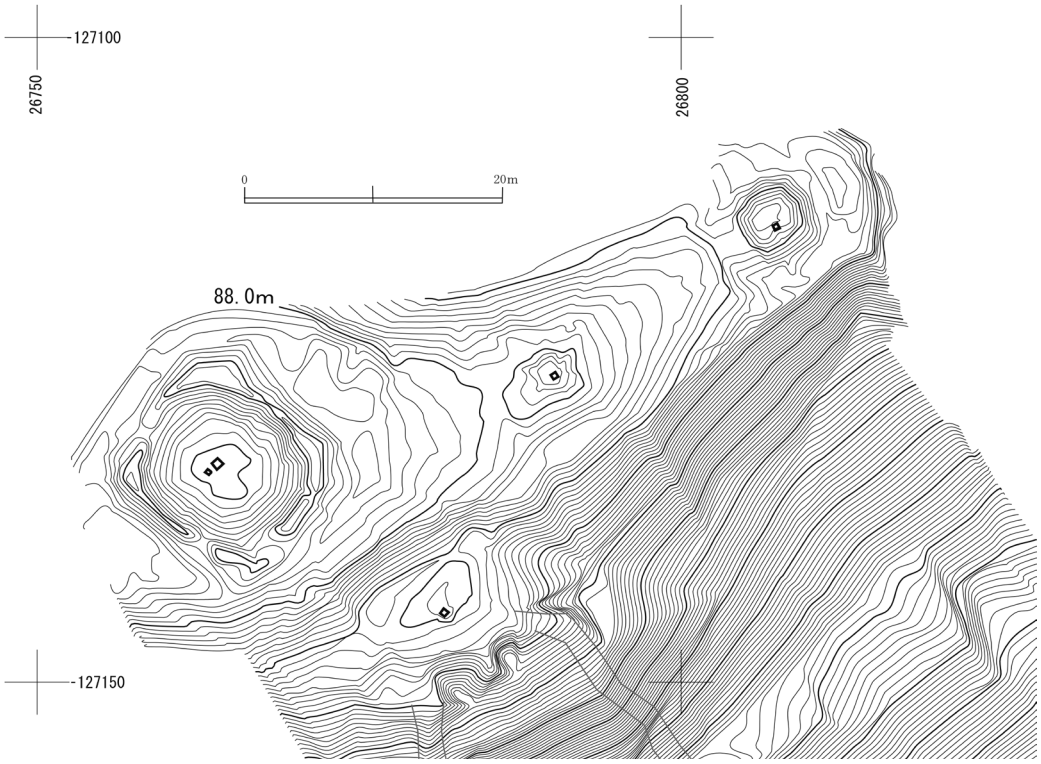
寺ノ上経塚からは、銅製経筒が出土していないため、銅製経筒が伴わない経塚が存在することになる。また渥美壷の中には、第７巻以外の法華経が入っていたとも推定されたが、その痕跡は認められなかった。すなわち銅製経筒が伴わない陶磁器壷単体埋納の塚の場合でも、経塚であった可能性は低くはないことになる。

同様の事例は、上須々孫館経塚でも認められた。渥美壷と須恵器系陶器壷が逆位と正位で出土したが、経典などはまったく確認できなかった。これらの事例から、葺石が伴う塚状の遺跡は、北東北においては経塚として差し支えないと考えている。

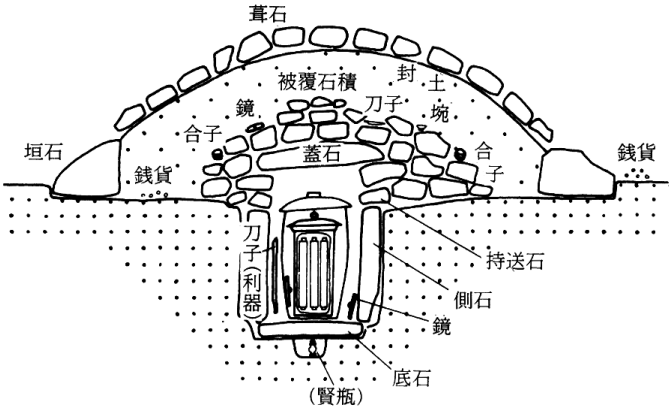
中尊寺峯の薬師堂経塚は、峯の薬師堂跡の直南側の丘陵の頂部に位置するし、毛越寺経塚は、金堂円隆寺跡の北背後の峰に存在し、両者は塚の大きさ、葺き石の状況などを総合的に勘案すると経塚以外は想定できない。

寺ノ上経塚の構築方法は、最初に塚を造る予定地の周りの土を平坦に掘り下げる。すると周辺が削平されたため塚を造る予定地は、表土層を伴ったまま一段高くなる。その上に周辺を削平した時に生じた土を盛り上げて、高い塚を造っている。岩手県遠野市の宮代Ⅳ遺跡の経塚も、同様の構築方法であった（遠野市教育委員会2022）。白狐塚遺跡もほぼ同じであることから、経塚である可能性が高い。

そして大型の塚を造ってから、その頂部にお経を入れた陶磁器壷に埋納している。すなわち経筒入りの外容器を地面に埋めてから、その上に塚を造るという奈良国立博物館が示している経塚模式図（奈良国立博物館1997）とは異なるタイプの経塚が、北東北には存在しているのである。そしてその様相から、北東北の大型の経



第12図　熊口五輪沢経塚



第13図　経塚模式図（奈良国立博物館 1997）

塚は、宝塔などの石塔と類似した意味合いを持つようになった可能性があるのではないだろうか。

白狐塚遺跡の調査によって、葺石の代わりに一部ではあるが陶器窯の灰原の陶器破片を使用していたことが確認された。陶器破片には、釉がかかり光を反射するものが多いことから、輝いて見えたはずである。経塚の葺石には、塚自体の保護の役割の他に、光り輝くということが求められていたことの証左ではないだろうか。

塚の地形測量からは、円形と方形のものがあることが分かっている。また熊口五輪沢経塚の例では、宝塔が伴っており、同様の事例は平泉町内でも何基か確認できる。経塚と宝塔が深く結びついている様相が、この状況からもうかがえる。

おわりに

これらは、科学研究費補助金「平泉研究の資料学的再構築」（研究代表者　東北大学大学院教授　柳原敏昭）、同「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究」（研究代表者　東北学院大学教授　七海雅人）の成果の一部をまとめたものである。時間の都合上、本稿では資料紹介的な内容に止まってしまったが、調査と測量を行った経塚は多数あることから、次年度以降にさらに詳しく記載したい。それらの中には、経塚模式図のように地面に穴を掘りお経を埋めてから塚を構築しているものも、１基であるが存在している。埋納形態も様々あるようである。

経塚の地形測量に関しては、羽柴直人さんと福島正和さんの手を非常に煩わせた。記して謝意を表したい。

参考文献

岩手県立博物館　『岩手の経塚』2000年
金子佐知子「前沢町寺ノ上経塚出土のかわらけ経」『岩手考古学』岩手考古学会2000年
北上市教育委員会　『上須々孫館跡』2006年
狭川真一「平泉の石造物」『平泉周辺石造物集成』「平泉研究の資料学的再構築」石造物班2018年
関秀夫　『経塚遺文』東京堂出版1985年
遠野市教育委員会『宮代Ⅳ・宮代経塚遺跡発掘調査報告書』2022年
東北歴史資料館　『東北の中世陶器』1983年
奈良国立博物館『関東・北陸地方に埋納されたやきもの』1997年
平泉関連遺跡発掘調査団『寺ノ上経塚発掘調査報告書』2017年
平泉関連遺跡発掘調査団『白狐塚遺跡発掘調査報告書』2018年
村木二郎　「経塚の拡散と浸透」『中世の系譜』高志書院2004年
八重樫忠郎「東北の中世陶器が語ること」『伊達市保原歴史文化資料館紀要第2集』伊達市教育委員会2020年